

主に愛されている者よ（3）

2008. 05. 13（火）

ベック兄メッセージ（メモ）

引用聖句

ヨハネの黙示録 2章1節から7節

「エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。

今日は先日に続いて、エペソにある、からだなる教会について少し考えたいと思います。

このエペソに集っている兄弟姉妹は、本当に主を第一にした人々でした。エペソ人への手紙を読むとわかります。このエペソの兄弟姉妹が持っていた深い信仰は、主からいただいた霊性の素晴らしさを示しているのではないかと思います。中でも、最もよく出てくる言葉は（22回出てくるのですが）、「愛」です。つまりエペソにいる兄弟姉妹には、「イエス様に対する純粋な愛」が保たれていたということです。このエペソの兄弟姉妹は、特別に恵まれた人々だったのではないかと思います。なぜなら、パウロ、アポロ、テモテ、そしてヨハネは、みなエペソに住んでいて働いたのです。ですからエペソにいる人々は多くのもを持つようになったに違いありません。エペソに集っている兄弟姉妹に対しての主の喜びは、大きいものだったようです。

しかし悲しむべきことに、このエペソの兄弟姉妹の中にも、主の非難を指摘されなければならないことがありました。イエス様は、「あなたには非難すべきことがある」と言っておられます。主はエペソの集会に対して、180度、悔い改めることを呼びかけておられました。「もし悔い改めなければ、そこにある燭台を取りのける」と警告を与えられているのです。兄弟姉妹がもし光を放つことが出来なくなれば、もはや何の役にも立たない者に

なります。したがって、主から取り除かれた燭台となってしまうだけです。

歴史は、エペソの集会が全く燭台としての使命を失って、主によって取り除かれたことを教えています。当時、現在のトルコには生き生きとした教会がたくさんありました。しかし、全部イスラム教のものになってしまいました。どうしてかといいますと、信じる者が「主を第一」にしなかったからです。妥協してしまったからです。初めの愛から離れてしまったからです。

私たちは次のことをエペソの集会の歴史から学ぶことができます。私たちは主イエス様であって、すべてのものを自分のものとして主からいただくことができるのです。例えばエペソの兄弟姉妹の持っていたものは、人間がだれも非難することのできないほど素晴らしい働き、正しい聖書の教え、いわゆる宗教に対しての心備えなどでした。しかし、最も大切にすべきものを見失ってしまう可能性がありました。結果として、もはや燭台としての働きを成すことができないということでした。つまりエペソの兄弟姉妹が、イエス様に対する初めの愛を失ってしまったのです。エペソ人への手紙が書かれた時から黙示録の書かれた時代までは、約35、6年間あったのです。ですから、三十何年間は非常によかったのです。しかし35、6年後で、エペソにいる人々は「初めの愛」を失ってしまったということです。

では「初めの愛」とは何でしょうか。前にも言いましたように、「イエス様との交わり」です。イエス様を知るようになった人、信じるようになった人々はたくさんいるでしょう。けれど本当の意味でイエス様に頼っている人々、イエス様なしに何もできないようになった人々は少ないのではないのでしょうか。もし、毎日みことばが私たちの泉となり、慰めとなり、力となり、知恵となっているならば OK です。しかしそうでなければ、非常に危ないのではないのでしょうか。

「初めの愛が保たれること」こそが、要求されています。これが、燭台がその場に置かれていることの大切な条件です。しかし、エペソの兄弟姉妹の心は、かつての主との親しい交わりの中にはいなかったのです。その結果、主は「もはや、わたしがあなたとともにいることができない。わたしはあなたに対して対立する」とおっしゃらざるを得なかったのです。

主は、まず何よりも私たちの愛、私たちの心を、ご自分のものにしたいと望んでおられます。すべてを捨てて主に拠り頼まない人は、初めの愛を捨て去った人であると言う以外なかったのでしょうか。

私たちのすべての行ないの背後には必ず動機があるものです。そして、その動機が大切なのです。しかしエペソにおいては、この「初めの愛」と「イエス様を仰ぎ見る信仰」が失われてしまったのです。

ではイエス様のすべての行動の動機は何だったのでしょうか。言うまでもなく、「まことの愛」でした。エペソ書5章25節を見ると、次のように書き記されています。

エペソ人への手紙 5章25節前半

キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた…

イエス様は、私たちの行ないにおいても、その動機が「愛」であることを求めておられます。「初めの愛」というのは、二心のないイエス様への愛です。また、本当の謙遜であり、ただちに主に従うことです。言うまでもなく、イエス様の再臨を毎日待ち望むことです。それから、みことばに対して無条件に服従することです。それとともに、兄弟姉妹に対しての「真心からの愛」も、「初めの愛」が保たれていることを意味しているのです。

私たちは、「初めの愛」を失ってしまったのでしょうか。もしそうであれば、私たちはいのちの源へと立ち返らなければなりません。悪魔に勝利を与えさせてはいけません。ミカ書の中に非常に素晴らしいことばがあります。

ミカ書 7章8節

私の敵。私のことで喜ぶな。私は倒れても起き上がり、やみの中にすわっていても、主が私の光であるからだ。

素晴らしいみことばです。「やみの中にすわっていても、主が私の光である」と。みことばを素直に受け取るなら、前向きに生活をすることができます。悔い改めてイエス様のもとに立ち返る者は、イエス様のもとにあつて罪の赦し、救い、力、勝利を得ることが出来ます。

イエス様がお語りになっている悔い改めを求めるみことばは、警告の言葉と結びついています。黙示録に戻りまして2章5節です。

ヨハネの黙示録 2章5節後半

「悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行つて、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」

もし、燭台が取りのけられてしまうならば、集会は「真の主のからだなる教会」となることができません。なぜなら、本当の集会としての働きができないので、光を与える者となり得ないからです。

主の前に容赦ない自己批判を下すことなくして、私たちの回復ということはありません。自分を開放し、自己破産、また自己批判をする者に対して、悔い改めと恵みが与えられます。もし悔い改めることをしなければ、私たちは主との交わりに入ることは出来ないということです。

創世記の3章24節に、次のように書かれています。

創世記 3章24節

こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

とあります。エデンの園から追放されるということと、燭台を取り除けられるということとは似ているのではないのでしょうか。二つとも主との交わりから遠ざけられることを意味しているからです。

前に読んでいただきました黙示録2章6節、7節を見ると、賞賛と約束について書かれています。ニコライ宗の行ないを憎んでいる人々が、主からの賞賛を与えられています。しかし、「初めの愛」から離れてしまった兄弟姉妹は、霊的な力と正義とを失って、ニコライ宗の行ないに捉えられてしまったのです。ニコライ宗は、聖職者と平信徒との間に区別をもうけています。ニコライ宗という宗派は、のちにペルガモの集会において一つの教えにまで発展したのです。2章15節を見るとわかります。これは、いつの場合も同じことでしょう。初めには悪い習慣としてはじまり、それが後に悪い教えにまで発展してしまいます。

例えば、このようなことが行なわれたのではないかと考えられます。賜物を与えられた一人の兄弟がいて、その兄弟がすべてのことを行ない、そのことを通してその兄弟が群れのすべてを執り行なう体制が出来上がるようになったと思われれます。そして、この体制が一つの慣習として群れの中に根を下ろしたのではないかと考えられます。何かの必要が生じてきて、一人の兄弟がすべて行なわなければならない事態が起こってきたということ、そしてその結果、他の兄弟たちはそのような状態に満足するようになり、他の兄弟にも奉仕の機会を与えられることを主に願うことをしなくなるということです。

後にドイツのマルチン・ルター、シュタイナーという人たちが、このように一人の兄弟がすべてを支配する教会の体制を打破しようと思い、試みましたが成功しなかったのです。

主は、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい」と語っておられます。御霊の声を聞き分けるためには、信じる者に主がお与えになる耳を持つことが必要です。聴く耳が開かれている者にのみ、御霊が語っておられることがよくわかるのです。

パウロはコリント第一の手紙の中で、はっきり書いたのです。

コリント人への手紙・第一 2章14節前半

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです

と。

主は、今もなお私たちにみことばを通してお語りになろうとしています。主のみことばだけが、私たちの行ないの基準となるべきです。教会の語ること、或いは教会の考えることが決して基準となるべきではありません。愛のない、また悔い改めのない教会は、捨て

られるだけです。したがって決して教会が基準となるということはありません。主のことばだけが基準となります。なぜなら、主のことばだけが変わることがないからです。「天と地は滅びても、わたしのことばは永遠に残る」とイエス様ははっきりおっしゃいました。

黙示録2章に戻りまして、7節において私たちは「勝利を得る者」という言葉を読むことができます。「勝利を得る者」は、約束を得るのです。集会全体に対してではなく、ここで語られている「勝利を得る者」ということばは、個々の信者に向かって語られているのです。「勝利を得る」ということは、外的な、また内的な戦いにおいて勝利を得るということです。

「いのちの木の実を食べさせよう」とも書かれています。食べるということは、交わりの証拠です。

二つの箇所を短く比較してみましょう。

創世記に戻りまして、2章9節と3章22、24節を読みます。

創世記 2章9節前半

神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。

と記されています。

創世記 3章22節

神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」

24節

こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

と書かれています。

エデンの園における生活、そしてこの実を味わうということは、主との交わりを表わしています。しかし、主との交わりを失うことによって、人はエデンの園から追放されてしまいました。

主との交わりは、エペソの兄弟姉妹にとっては欠くことのできないことでした。主は彼らに向かって、「あなたがたが昔の交わりを回復することがなければ、エデンの園から追い出してしまうおう」と語っておいでになります。しかしエペソの信者たちにとっては、7節において主との交わりの回復が約束されていたのです。

最初の人間であるアダムは、主に対して罪を犯すことによって、園のいのちの木の実を取って食べる権利を失ってしまいました。いのちの木については、黙示録 22 章、聖書の最後の章におきまして、3 回その言葉が出てきています。「いのちの木」ということばです。

ヨハネの黙示録 22 章 2 節

都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があつて、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。

ヨハネの黙示録 22 章 14 節

自分の着物を洗つて、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通つて都には入れるようになる者は、幸いである。

ヨハネの黙示録 22 章 19 節

また、この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。

新約聖書で、「木」あるいは「十字架」と訳されている言葉は、ギリシヤ語の原語を見ると全く同じことばです。聖書を読んでみましょう。使徒行伝の 5 章になります。

使徒の働き 5 章 30 節

「私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。」

ここで「十字架」のかわりに「木」と思つても同じです。

使徒の働き 10 章 39 節

「私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行なわれたすべてのことの証人です。人々はこの方を木にかけて殺しました。」

ここでも「木」のかわりに「十字架」と思つても同じです。

使徒の働き 13 章 29 節

「こうして、イエスについて書いてあることを全部成し終えて後、イエスを十字架から取り降ろして墓の中に納めました。」

ここで「十字架」のかわりに、「木」と書いても同じです。ガラテヤ人への手紙の 3 章を見ても同じことが言えます。

ガラテヤ人への手紙 3 章 13 節

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから買い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたもので

ある。」と書いてあるからです。

ここで「木」のかわりに、「十字架」と読んでも同じです。もう一箇所、ペテロ第一の手紙2章24節です。

ペテロの手紙・第一 2章24節

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

これらの箇所において「木」と記されているところを、「十字架」と言い換えることも、「十字架」と書かれているところを、「木」と言い換えることもできます。

イエス様の「十字架の死」、或いは「木にかけられた死」を通して、すべての人が「永遠のいのち」を得ることができるようになったのです。「イエス様ご自身が、いのちの木」です。イエス様がたましいのふるさとへの帰り道を備えてくださったのです。イエス様を通して、天国の父への道が開かれたのです。

今日のこれらの言葉は、墮落した信者に向かって語られている言葉です。ドイツ語において、「墮落した」ということを語る際には、それはいつも男女の関係における失敗を意味しているのです。しかしイエス様がこのことばを用いておられるのは、「初めの愛」から転落したことを語っておいでになるのです。最も大切なことは、「イエス様に対する純真な愛」です。その他のすべての事がらは、第二次的な意味だけしか持たないのです。

有名なコリント第一の手紙、いわゆる愛の書である13章3節、
コリント人への手紙・第一 13章3節

また、たとえ私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。

毎日考えるべきみことばではないでしょうか。イエス様に対する愛がなければ、私たちは何をやっても何の役にも立たず、的外れです。ですからパウロは、コリントにいる兄弟姉妹たちに厳しい言葉を書いたのです。

コリント人への手紙・第一 16章22節前半

主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。

イエス様は私たちすべてに対して、「あなたはわたしを愛するか」と聞いておられます。私たちは、「主よ。あなたは全部知っておられます。私があなたを愛していることをあなたにご存じです」と言えるでしょうか。

「初めの愛」を持たない信者は、火の消えた灯のようなものです。このような人は、何の価値もなく、何の役にも立たない者です。

最も大切なことは、主の御前に静まることです。「静まる時」を持つことです。イエス様のもとで静かな時間を持つことによって、私たちに新たな愛が回復せられ、主との交わりが私たちの新しい喜びとなります。

イエス様との交わりの時を持つようにしてください。イエス様に語っていただく時を持ってください。イエス様にあなたの恥を見ていただくようにしてください。そうすることによって、罪の赦しを体験し、主の恵みを驚くほどに得る者となり、主を心から礼拝するようになるに違いありません。

ヨハネは、主からお聞きしたことばを書いた時、心から当時の信じる者のために祈ったに違いありません。パウロももちろん同じ態度をとったのです。パウロは人々を導くためにそれほど苦労しなかったと思うのです。イエス様を紹介すれば自分の役目はもう終わり。この先は主の問題、主の責任になります、と。しかし、救われた人々を成長させるために、彼は考えられないほど苦労したのです。一箇所、読むとわかります。

コリント人への手紙・第二 11章2節

というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

つまり主を信じるようにされた者は、イエス様の花嫁としてふさわしく歩んで欲しい。これこそパウロの祈りの目的でした。

イエス様の花嫁としてふさわしく歩むこととはいったいどういうことでしょうか。どのような人なのでしょう。答えは次のようなものでしょう。

- ・かつて罪の泥沼から救い上げられた、という事実を忘れない人。
- ・イエス様の尊い血によって、罪は洗い清められ、永遠の栄光のために召し出されていることを絶えず覚える人。
- ・天におられる花婿であるイエス様の愛を絶対に疑わない人。
- ・いかなる時でも、イエス様が私を愛し、決して忘れてたり、捨てたりなさることはないということを確信している人。
- ・イエス様のために喜んで重荷を負い、迫害されることも恐れない人。
- ・むしろイエス様のために苦しみを受けることが自分の喜びであり、特権であり、賜物であり、誉れであると信じる人。
- ・イエス様だけをお喜ばせし、イエス様に栄光を帰することを心から望んでいる人。
- ・イエス様に対する礼拝を真実な心で常にささげている人。

- ・すべてのことにおいてただイエス様だけに拠り頼み、絶対的な信頼を持っている人。
- ・イエス様なしに、イエス様から離れて話したり、考えたり、願ったり、行なったりすることのない人。
- ・日常生活において、常にイエス様との交わりだけを本当の喜びとして持っている人。

そのしるしは、謙遜、心の純粋さ、自分を考えない愛、喜んでする従順な奉仕などの形で現われてきます。

- ・その人にとってイエス様がすべてを意味している人。
- ・すべて主にあって行ない、主とともに生きる人。
- ・御霊を悲しませることを恐れている人。
- ・もはや自分だけの利益を考えようとしない人。
- ・すべてのもの、すなわち賜物や才能や財産などを主のためにささげることができる人。
- ・何とかしてイエス様をよりよく知りたいと願い、目標を目指して走りぬくことができる人。

そのような人は、イエス様が許嫁（いいなずけ）とされた者です。私たちの場合はいったいどうでしょうか。

- ・私たちはいったいイエス様とどのような関係を持っているのでしょうか。
- ・イエス様が私たちをご覧になるとき、喜ぶことがおできになるのでしょうか。或いは悲しむようになられるのでしょうか。
- ・私たちは本当にイエス様と一つになることだけを、心から望んでいる者なのでしょうか。

了